ノダ文の通時的研究
―「事情を表さない用法」を中心に ―

幸松英恵

キーワード：ノダ、ノサ、終助詞サ、ノダの通時的調査

1. 研究の背景
1.1　現代語におけるノダの用法の広がり

ノダの用法は多岐に渡っており、代表的なものに限って列挙しても以下の５種類が認められる[1]。

(1)「すみません、この先通れません」(「どうして？」)「先ほど、事故があった**んです**」
(2)（人が集まっているのを見て）「事故でもあった**んだ**な」
(3)（人が集まっているのを見て）「こんなところにも人が集まる**んだ**」
(4)「実は、昨日、ここで事故があった**んです**」
(5)「早く来る**んだ**！」

(1) は通行できないという事態の〈事情〉[2] として、事故があったという事実を伝えている。(2) は人が集まっているのを見て、もしや事故があったのではないかと〈事情〉を推論している。(3) は人が集まっているのを知覚し、その認識を言語化している。筆者は幸松（2016, 2020）等において、それぞれ（1）を《知識のノダ》、(2) を《推論のノダ》、(3) を《発見のノダ》と呼んだ[3]。

（1）と（2）のノダ文は、波線を付した事態に対する〈事情〉を表しているという点で、典型的な事情文だと言える。(1) と（2）を分けるのは、前者の命題が発話時において話し手の知識であるのに対して、後者の命題は発話時に推論によって導かれた事態であるという相違による。(3)

---

[1] 庵ほか（2001:282-290）では「「のだ」の様々な用法」として、①「理由、解釈」②「言い換え」③「発見」④「再認識」⑤「先触れ」⑥「前置き」⑦「命令、認識強要」を挙げている。本稿との関係をまとめると、①「理由、解釈」と②「言い換え」は、本稿の（1）と（2）に該当する。庵ほか（2001）では「のだ」がある事態の「理由、解釈」なのか「言い換え」なのかで分けているのに対し、本稿では命題の情報源が「知識」なのか「推論」なのかで（1）と（2）を分けている（(1) と（2）それぞれに「理由」の場合もあれば「言い換え」の場合もある)。③の「発見」は本稿（3）に、⑤の「先触れ」がほぼ本稿（4）に、⑦の「命令」が本稿（5）に該当する。本稿で挙げられていない④「再認識」は過去形「んだった」の用法であり、⑥「前置き」は従属節述語「のですが」の用法である。

[2] 典型的なノダ文が表す、ある事態が起きた原因や理由や背景事情、その事態が持つ意味などを総称して〈事情〉と呼び、日常的な意味での「事情」と区別するために〈カッコ〉をつけて表記する。

[3] 筆者が《知識のノダ》と《推論のノダ》と呼び分ける（1）と（2）に関しては、多くの研究者が「事情」「説明」などの用語とともに記述してきた（松下 1930「事情」、寺村 1984「説明」、田野村 1990「背後の事情」、奥田 1990「説明」、益岡 1991「課題解決」など)。(3) については、90 年代以降の論文で取り上げられるようになってきた用法である。

は、発話現場において知覚により確認された事態をそのまま言い表している文と考えると事情文とは言いにくい。しかしこうしたタイプのノダ文は、知覚事態そのままをただ繰り返すというよりも、知覚した個別的・具体的な事態をふまえて一般化・抽象化した事態を導き出して把握して述べる場合が多い[4]。与えられた事態から〈事情〉を推論して把握する《推論のノダ》との境界に悩むケースも多く、(2) と (3) は緩やかに繋がっていると考えることもできる。つまり、(1) (2) (3) は〈典型―周辺〉の差はあったとしても、大きく見れば事情文の枠組みにおさまる用法群ではないかと考える。

一方で、〈事情〉という枠におさめにくいのが (4) と (5) である。(4) は、命題を伝達すること自体に目的があり、何かの事態の〈事情〉として発話されていると考えにくい。幸松 (2020) ではこれを「事情を表さないノダ」と呼んだ。(5) は聞き手に対して行為要求をしているノダ文である。幸松 (2022) ではこれを《命令のノダ》とよび、近世後期資料から現代までの資料を通時的に調査した上で、この行為要求文としてのノダがどう定着してきたのかを論じた。

本研究は、幸松 (2020) で論じた (4) のタイプのノダ文を再び取り上げ、「事情を表さないノダ」の実態とその変遷について、より詳細に見ていこうとするものである。

1.2　幸松 (2020) の概要と課題

幸松 (2020) では、近世後期の言語資料を用いてノダ及びノダ相当形式の文を 609 例抽出した。これらの用例を分析した上で、次のような点を指摘した。

- 調査した近世後期資料では、ノダ文が 184 例、ノサ文が 214 例抽出された。ノダ系表現におけるノサ文の使用の多さが目立った結果となった。
- 近世後期のノダ文は、〈事実〉[5] と〈事情〉が「―ノハ―ノダ」構文で一文のうちに表されている場合もあれば、二文に渡って表されている文もあるが、総じてある事態と別の事態を結びつけている事情文として了解できるものであった。
- 近世後期のノサ文は、話し手の評価判断や話し手の知識を聞き手に伝達する際に添えられる用法が目立った。これは現代語における「事情を表さないノダ」の用法に重なるものであった。

以上のような観察から、幸松 (2020) では次のような仮説を提示した。

> 近世後期江戸語のノサ文は〈事情〉を表していなかった。自身の意見や経験などを伝える際、聞き手に「披歴する」という話し手の伝達的態度を添えるために用いられる終助詞的用法の文だったと考えられる。しかし (平叙文の用法としては) ノダ以上に高い頻度で用いられて

---

[4] 発話現場において知覚した事態をそのまま言語化する文 (=「発見の文」) は、述語を伴わない一語文でも非ノダ文でも表すことができる。人が集まっているのを発見した瞬間、その知覚事態をそのまま (驚きを込めて) 発話する場合は「あ！人が集まっている！」という非ノダ文で十分である。《発見のノダ》は、個別・具体的な事態 (人が集まっている) のを知覚して「こんな場所にも人が集まる」という一般論を導き出して納得し「こんな場所にも人が集まるんだ」と発話するようなケースが多く、ある事物に対して話し手があらかじめ何らかの先見・予想を抱いていて、その通りではなかったことを意外に感じたり、その通りになったことに納得しつつ発話しているものと言える。詳しくは幸松 (2016) を参照されたい。

[5] ここでいう〈事実〉とは、ノダ文によって〈事情〉を説明される対象となる事態を指している。

いたノサは、現在では一般的には用いられなくなっている。そして現代語のノダには、かつてノサが担っていた用法が見られる。ここから推測できる歴史的変化の過程は一つであろう。ノサは消滅し、その用法はノダに集約していったのではないだろうか。（幸松 2020:175）

幸松（2020）で明らかにしたのは、近世後期のノダ文が事情文であったと言えること、近世後期のノサ文には、現代語に見られる「事情を表さないノダ」と重なる用法があることの2点であり、歴史的変化についての見通しは、あくまでも仮説であった。

用例数を増やしてノサを分析し直すこと、その上で、この「事情を表さない文」がどのような変化を辿ったのかを通時的に確認すること、この2点が本研究の目的である。

2. 近世後期江戸語のノダとノサ

2.1　ノダ系表現の抽出

幸松（2020）では、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』江戸時代編の江戸・京都・大阪で刊行された洒落本30作品と、江戸で出版された人情本の8作品に対して、コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用し用例を抽出、さらに筆者が人情本4作品を加え、手作業で用例を抽出した。結果、42作品の資料から609例のノダ系表現を収集していた。

本研究では、近世後期・近代・現代と通時的研究を行うため対象を江戸語に限定し、用例数を増やすことを目的として、以下の3種類の資料を用いた。

1）『日本語歴史コーパス』江戸時代編の人情本（コア、非コア）、洒落本（コア。ただし江戸刊行本のみ）を対象に「中納言」を用いて対象形式を抽出。
2）『岩波日本古典文学大系（電子版）』の近世テキスト[6]を対象に形式検索をかけたのち、目視で対象形式を抽出。
3）紙媒体の書籍から目視で対象形式を抽出。

抽出に用いた作品名は論文末に記載する。対象とした語形式は以下の通りである[7]。

・ノ＋ダ系：のだ、のだへ、のだよ、のだね、のだな、のだは、のだはな、のだのう、のだぜ、のだっさ、のだす
・ノ＋終助詞系：のさ、のよ、のす

幸松（2020）では、上方語のノジャ系表現（のじゃ、のじゃわい、のじゃへ、のじゃのう、のじゃな等）も含めて609例を分析していたが、今回はノジャ系表現を除外し、江戸語のみを対象に用例数を増やしたところ、〈ノ＋ダ〉系で568例、〈ノ＋終助詞〉系で361例、合計929例が抽出された。以下、それぞれ前接する品詞別に分類し、用例数を示す[8]。

---

[6] 国文学研究資料館によるデータベース。2020年6月検索実施。現在では使用できなくなっている。
[7] 疑問の終助詞カと否定辞ナイを含む、ノカとノデハナイは別形式と考え、対象としない。また、文末・終止の位置に現れる場合のみ対象とし、ノデスカラ、ノデスガ等の従属節述語は対象としない。

表１　抽出された〈ノ＋ダ〉系

形式	動詞	形容詞	名詞	計
ノダ	336	19	0	355
ノダヘ	66	4	0	70
ノダヨ	47	4	0	51
ノダハ	24	4	0	28
ノダネ	20	4	0	24
ノダナ	23	1	0	24
ノダノ(ウ)	7	0	0	7
ノダッケ	3	0	0	3
ノダゼ	2	0	0	2
ノダッサ	2	0	0	2
ノダゾ	1	0	0	1
ノダス	1	0	0	1
計	532	36	0	568
%	**93.7**	**6.3**	**0.0**	100.0

表２　抽出された〈ノ＋終助詞〉系

形式	動詞	形容詞	名詞	計
ノサ	214	101	22	337
ノヨ	14	7	0	21
ノス	2	1	0	3
計	230	109	22	361
%	**63.7**	**30.2**	**6.1**	100.0

上表における「動詞」とは「行った ノダ / ノサ」のような例、「形容詞」とは「いい ノダ / ノサ」のような例、「名詞」としたのは「名詞＋である ノダ / ノサ」のような例を指す。以降、〈ノ＋ダ〉系を総称してノダ文と呼び、〈ノ＋終助詞〉系はそれぞれノサ文、ノヨ文と呼び分ける[9]。

上表から、ノダは圧倒的に動詞文が多く、9 割以上を占めることがわかる。形容詞文は少なく、名詞述語文は 1 例も見られない。一方のノサには一定数の形容詞文が見られ、さらに「名詞＋である（であります）のさ」といった名詞述語文も見られる。こうした述語の品詞性の偏りは、ノダ文、ノサ文それぞれの用法を反映したものと言える。次節以降、それぞれの用法を詳しく確認していく。

2.2　ノダとノサの用法

近世後期ノダ文には、疑問詞疑問文として用いられている文（「どこへ行くのだ」等）が一定数見られる。これを除いて平叙文に限って観察すると、与えられた事態の〈事情〉を説明したり(6)、自身で〈事情〉を察して把握したり（7)、〈事情〉を導き出して聞き手に言い当てる文（8）などが見られる[10]。以下、発話現場における「与えられた事態」に波線を付し、ノダ文には下線を付す。

---

[8] ノダ系表現には様々なバリアント（異形態）が存在する。ノダと表記した場合は、ノデゴザイマス、ノデアリマス、ノデス等の文体的なバリアント、ンダ、ンダアなどの発音のバリアント、表記のバリアントも含まれている。表記のバリアントとして、例えばノダヘとした中には「のだへ」「のだえ」「のだゑ」があり、ノサには「のさ」「のサ」「ノサ」といった種類がある。

[9] 3 例のみ見られたノスのスについて、湯澤（1954:656）では「「す」は江戸語特有の語であってその用法は「さ」とほとんど同様である。あるいは「さ」からきた語ではなかろうかとも思われる。ただし「さ」よりももっと打ち解けた場合に用いるようである」とある。

[10] ノダ文のうち明らかに形式名詞文とわかるものは除いている。判然としないものは数に入れている。

(6) 長「なぜといつて先刻も米八さんのことをいつたら知らぬ貝をしてお出なすつていつの間にか御夫婦になつておいでなさるじやあ有ませんか」

丹「なにそういふわけもないがおいらが浪人してこまつて居て殊に病気の最中来て彼是世話をしてくれたからつい何した**のだ**」

長「つい夫婦におなりか」(春色梅児与美)

(7) (小三が金五郎に対して酒を飲むのはほどほどに家に帰れという意見をしたところ、他に馴染みの男がいるのではないかと疑う金五郎)

小三「をや　久しいものでありますよ」

金「なに久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて。はやく帰さうと思ふ**のだ**な。よし／＼そんなに邪广になるなら帰つてやらうとめるな」(仮名文章娘節用)

(8) 美「其気でのろけられちやあ事だね　しかし無理はないのさ　程がよくつて男が宜てお金が有といふもんだからね　相替らず御盛かゑ」といはれてお楽は両眼に少し泪をうかめ

らく「いいゑ」

美「どうしたのだゑ　又喧嘩でもした**のだ**ね　今日もひどく浮ない様だつたから急度左様だらうと思つてゐたは宜加減におしな」(春色江戸紫)

このように、発話動機の異なりがあったとしても、近世後期のノダ文は総じて、出来事や行為を表す動詞に後置し、与えられた事態の〈事情〉を表す文になっていると言えた。

一方、近世後期ノサ文にはノダ文に見られないタイプがある。1つ目は、話し手の評価判断を表す文である。前述したように、ノサは相対的に形容詞につく例が多かった。これは(9)～(11)のような評価判断文が一定数見られるためである。

(9) 増「そうか　そんなら　もつとつがふか　仇さんさあ茶はいやか」

仇「何いい**のさ**　茶は茶酒は酒だあな」(春色辰巳園)

(10) 女「をや／＼そんなら晩からおらも夜鷹にでやう」

ばば「ちげへねへ　出るがいい**のさ**」(花廼志満台)

(11) らく「なに惚談気じやあ無んだけれども　つい口癖になつて仕舞たのだは」

美「其気でのろけられちやあ事だね　しかし無理はない**のさ**　程がよくつて男が宜てお金が有といふもんだからね」(春色江戸紫)

さらに、ノサ文にはノダ文にはない名詞述語文の例も22例見られた。以下の「行留りでありますのさ」「年でもないのさ」といった名詞述語文は、やはり話し手の評価判断を表す文である。

(12) よね「さよふさ私あ間抜さ。お長さんといふ寔にいいなづけのあるおまへさんに。こんなに苦労するから。間抜の行留りであります**のさ**」(春色梅児与美)

(13) 里　茶は出来たか

禿　もふ出来いした　さああがりいし

忠　まだ。茶をうれしがる年でもない**のさ**。(南閨雑話)

ノサ特有のタイプの２つ目は、話し手の知識を聞き手に伝達する文である。以下は動詞にノサがついた例であるが、与えられた事態に対する〈事情〉として述べているという意味が希薄である。(14)（15）（16）のように一人語り的に伝達する文もあれば、(17)（18）のように質問されたことに対して意外性のある回答[11]として答えている文もあるが、どちらにしても、命題を聞き手に伝達することを目的とした文であると言える。

(14) 佐「旦那この間ね。あなたがお出なすつたのを見とどけまして。ちよつぴり趣向してめへりましたら。もうあとのお祭りで。大きに鼻をあきました**のさ**」
金「ははあさうだつたか。そいつあ残念だつけの。」（仮名文章娘節用）
(15) 与「どうせあんな不実ナ女だから始終女郎にでもなるだろうよ」
万「うまくおいいなはるぜ　さましてたんとおあがり　ぢやうだんのけて　私きが今日夫多川の比左喜の仮宅へお約束で往ツた**のサ**　さうすると一座の…」（春色恋廼染分解）
(16) 重「どんな事だか知りまへんが。決して右や左申ンすまい。実正にこれで吾儕も安心いたしンした。だが爰に御相談があります**のサ**。委細は与四さんにも。お咄し申ンしたから。」（春色恋廼染分解）
(17) 酔「しかし貴さまたちは、三百六十日目を睡て居るから、ねぶたくはあるまいな」
ゆず「へ、、、、、目を塞で居ても心は寐ませぬから、ヤハリ寐る時は寐ます**のさ**。…」（浮世風呂）
(18) たいこ「おひとりかへ。」
客「此ごろは連は一切ない**のさ**。」
たいこ「コレハきつい。」（傾城買四十八手）

さらに、ノサに特有のタイプとして、(19)（20）のように話し手の意志を表明する文が見られた。

(19) らく「左やうさ。誰だつけかそんな咄しをしました。左様してお前はんは。今何所にお在なさい升の」
惣「いづれ何所かへ。店を出すのだが。当分三崎に居る**のさ**」（春色江戸紫）
(20) こう　おめへは強勢に。肥太てゐるの
たま　これからぬしに。痩るやうに。してもらいひす**のさ**。（花街鑑）

ノサ文には、こうした話し手の意志表出の文のほか、下の（21）や（22）のように今後起こるであろう事態を予測し、話し手の考えとして（一種の知識伝達の文のように）述べる文も見られる。

(21) 三　ぬしの。おじやまに成ゐせふかと。おもつてさ
谷　いらぬお心遣ひさ。まだ。かんじんの。相手が来ねへもの
三　今にお出なんす**のさ**。（甲駅新話）
(22) 安　ほんに久しぶりで　やう／＼廻つて来た
歌　さるにならねへでよかつたね
そ　なに今に猿のやうに赤くなる**のさ**（深川新話）

[11] より正確に言えば、「聞き手にとって意外性のある回答である」と話し手が想定している回答である。

対して近世後期のノダ文には未来テンスの文がほとんど見られず、命題は既実現事態に偏っている。ノダ文とは、すでに実現している事態を前にして、その事態が引き起こされた原因・理由や背景事情、その事態が意味することを述べる事情文であったため、自然と命題が既実現事態に偏るのであろう。未来テンスのノダ文もあるにはあるが、(23) のように聞き手への行為要求を表している文である。

(23) よしか。そこでおめへが大きな声で。卒次さんまちなせへ／＼と。おつかけるふりをしてにげる**のだ**（明烏後の正夢）

以上、ノサ文に見られる文タイプとして、評価判断文、知識披歴文、意志表明文を挙げてきた。これらに共通して言えるのは、命題内容を聞き手に伝達することを目的とした文であるという点である。以降これらの「事情を表さない」用法を総合して《披歴用法[12]》と呼ぶことにする。聞き手に披歴する内容が、話し手の評価の場合もあれば、話し手の知識の場合もあれば、話し手の意志の場合もある、ということである。披歴内容を問わないことから述語の品詞性や命題の時制にも制限が見られないのだと考えられる。

事情文としてのノダに披歴性が全くないのかと言えば、必ずしもそうとは言い切れないので《披歴用法》という命名は適切ではないかもしれない。しかし事情文のノダの場合、ある事態が発話現場に与えられており、その〈事情〉にあたる事態を付け足して説明したりそこから〈事情〉に当たる事態を導き出して把握したりするものである。それに対して《披歴用法》の方は、命題そのものを聞き手に伝達すること自体に重点が置かれている。

翻ってノサ文の方に〈事情〉を述べるという側面がないのかと言えば、「事情」の捉え方によってはそうとも言える場合が往々にして見られる。例えば先に挙げた（14）とて、話し手が置かれている状況にまつわる何らかの“事情”を述べているとも言えなくはない。

(14) 再掲　佐「旦那この間ね。あなたがお出なすつたのを見とどけまして。ちよつぴり趣向してめへりましたら。もうあとのお祭りで。大きに鼻をあきました**のさ**」
金「ははあさうだつたか。そいつあ残念だつけの。」（仮名文章娘節用）

しかし「大きに鼻をあきました」という出来事は、発話現場で先行発話などの中に与えられた事態の直接的な原因や理由、意味づけとして述べられているわけではない。現代語で言えば「昨日も大学には行かれませんでした。風邪をこじらせたんです」のように「からだ」等の理由文で言い換えられるようなノダ文もあれば、話題の冒頭で「実は昨日、有名人に会ったんです」と発話できるノダもある。前者のノダは所与の事態を受けていると言えるが、後者のノダは事態を受けて発話されている意味合いが希薄である。筆者は後者のタイプを「事情を表さないノダ」だと考えており、近世後期のノサ文はこれと同種だとみる。すなわち、(9) から (20) までのノサ文は、与えられた事態を受けて、その〈事情〉を述べているという意味合いが相対的に希薄で、命題内容の伝達そのものに目的があると感じられる文である。こうして近世後期ノサ文による《披歴のノサ》と現代語ノダ文の〈事情〉を表さない用法は共通していると考える。

[12] 本来は「披瀝」であるが、本稿では常用漢字で置き換えた表記として「披歴」を用いる。

2.3 （ノ）サとは何か

近世期に発生したノダ文が事情文として機能していた所以はその組成から説明できる。つまりノダとは、準体助詞ノの機能により前接する用言を体言相当にまとめ、その後に断定する形式であった。それゆえに「―ということだ」とパラフレーズできる意味を持っていた。与えられた事態を主題として「(―というのは）―ということだ」と解説する文であったことで所与の事態の〈事情〉を述べる用法を有するようになったと考えられる。

仮にノサがノダのように、前接用言を体言相当にまとめ、その後に断定しているものであれば「(―というのは）―ということだ」とパラフレーズできるノダと同様、事情文として機能していてもおかしくはなかった。ところが、話し手の知識や評価、意志などを聞き手に提示する《披歴のノサ》は、もっぱら聞き手への伝達的態度を示す文であり、題目を受けた準体助詞述語文というよりは、ノサを添えることで発話伝達的な態度を示す終助詞文と見るべきではないかと思われる。

ノサとはいったい何かを明確にするためには、まず、近世語の終助詞サとは何かを明らかにしなければならない。終助詞サについて書かれた先行研究の言説のうち、本稿に関わる部分を以下にまとめる。下線は本稿筆者が付したものである。

長崎（1998,2008）

- 近世における<u>終助詞サは広い位相で用いられており</u>、丁寧な会話、改まった会話でも使用されていた。どちらかといえば女性の使用が多い。
- 近世江戸語における終助詞サの殆どは<u>体言・体言相当に接続し、断定辞として働いていた</u>。江戸語における丁寧な断定表現「でございます」と常体で使用される断定辞「だ」の間を担うニュートラルな語であった。

黄（2017）

- サは少数ながら用言にも接続するため、<u>「断定」という意味説明は十分ではない</u>。
- 終助詞サは、返事をするとき、反論をするとき、過去の経験や知識を示すとき、物事や人物に対する話し手の思い付き（認識）や感情を話すときに用いられ、<u>「相手より自分が知っていることを示す」というのが基本的な意味</u>である。

鶴橋（2018）

- 長崎 1998 の説に従えばノサはノダ相当である。しかし意味として「断定」（注：本稿でいう非事情文）の例は見られるが、<u>「説明」（注：本稿でいう事情文）の例は見いだせない</u>。ノサが題説構文に還元できるか否かはなお検討の余地がある。<u>サに指定相当の働きがあっても、ダと等価ではなかった</u>のだろう。

長崎（1998）は、近世江戸語の終助詞サのほとんどが体言に接続することを根拠としてサには「断定の働き」があったと述べている。これに対して黄（2017）は、サが用言に接続することもあるという事実を挙げて「断定」という見方に疑義を呈し、終助詞サの談話機能を調査した上で「相手より自分が知っていることを示す」のが終助詞サの基本的な意味だとしている。鶴橋（2018）

は、本稿の観察と同じでノサには説明文（事情文）が見られないことから、終助詞サに断定の助動詞ダのような指定相当の働きがあったとしても、それはダと同じものではなかったのだろうと述べている。

こうした先行研究をふまえ、近世後期江戸語の終助詞サについて調査を行う。近世から近代にかけて終助詞サがどのように変化したのかを概観し、それに伴ってノサがどのように変化を遂げたのかを観察する。

3.（ノ）サの変化

3.1　近世後期における終助詞サ

『日本語歴史コーパス』江戸時代編を対象に、終助詞サがつく文1296例を抽出した[13]。このうち準体助詞ノにサが接続するノサ文162例を除いた1134例を対象にして間投助詞として用いられているか終助詞として用いられているかの判定を行なった。その結果、間投助詞と認められたものが418例[14]、終助詞と認められたものは655例であった[15]。

表３　近世期の終助詞サ

形式	前接品詞	用例数	%
終助詞サ	体言類	575	**87.8**
	用言類	80	**12.2**
	計	655	100.0

表４　表３の用言接続する終助詞サの内訳

用言接続80例中	用例数	%
「の」に接続可能なもの	21	**26.3**
「の」に接続できないもの	59	**73.8**
計	80	100.0

終助詞サの文655例を調べると、575例が体言類に接続するサであった。これは全体の9割近くに上る。このとき「名詞」と言わず「体言類」としているのは、「人違いさ」のような「名詞＋さ」だけではなく、「かわいそうさ」（形容動詞語幹＋さ）、「ずいぶんそうさ」（副詞＋さ）、「ここまでさ」（助詞＋さ）など、形状言的なものや助詞類等、活用しない語全般を含んでいるためである。以下に体言類に接続するサ文を挙げる。

(24) 米「あい人の噂も七十五日過たむかしは兎も角も今じやあ実の兄弟同前　其様なことは打捨ておゐてまあ其金はいくらだへ」
鬼「ゑはい何少しでごぜへます　たつた六七両さ」（春色辰巳園）

(25) 静「はて歳もまだ春色盛といふ声だが」
由「やつと十五六だらふ　節まはしの様じやあねへ　まだとんとあどけねへ娘さ」（春色連理の梅）

終助詞サの文655例中のうち、動詞や形容詞といった用言類に接続しているのは80例であっ

[13] 『日本語歴史コーパス』江戸時代編の人情本コア・非コア、洒落本コアを対象としている。コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用して、品詞情報（大分類「助詞」中分類「終助詞」）を利用し、語彙素「さ」で抽出した。

[14] 『日本語歴史コーパス』では、終助詞サと間投助詞サの区別はなく、全て終助詞に分類されている。このうち、「なにさ 今に容子がわかりせへすりやあ。」（仮名文章娘節用）のような「なにさ」をはじめ、「これさ」「ををさ」「あいさ」「さればさ」のような文中に用いられるサを間投助詞として除外した。

[15] このうち、「口あ啌でも心が実だわさ」（当世左様候）のように終助詞「わ」に接続しているワサ文、「をや仇吉さんおつかあが来たとさ」（春色辰巳園客）のように伝聞の文にするトサ文は除外した。

た。80 例というのはそれなりの数であるように見えるが、その内実はというと、「近いうちには知れようさ」「あの子には構わずさ」「あるめへさ」のように、助動詞「う」「ず」「まい」などが接続していたり、「性根を決めて返答しやれさ」「とっておけさ」のように活用上、準体助詞が接続しない例であった。つまりこれらはそもそもノサにはなり得ないものである。結局、一つ一つ判定した結果、ノに接続できるのにもかかわらず、用言に直接サが付いている（26）（27）のような例はごく少数であり、21 例のみ見られた。

(26) 治「…まあ／＼一つ飲ねへ　なんと是から気を替て。何処ぞへ往て呑直さうじやあねへか」
たき「ああ白川町へでも往て呑むさ」（花廼志満台）

(27) 由「さあそれじやあね 其処の土蔵前の長廊下を真直にいつて つき当りの座敷から右へまがると 椙戸があるから そこを開てはいつて 直左の方の片方口の大鼓張をあけると 其処に房さんが在るから まあいつて逢て来るさ」（春色連理の梅）

近世期、ノを介さず用言の後にサがついているのは、上のように話し手の意志を表明する文であり、発話現場における意志の表出であるという現場性がこの例外現象に影響している可能性があるように思えるが、ここでは深く立ち入らない。

上の調査から、近世後期の終助詞サは、特殊ケースを除き、用言類に接続する場合は基本的にノを介していたことがわかる。これは長崎（1998）が指摘した「江戸語の終助詞サの殆どは体言・体言相当に接続していた」という説を追認したことになるが、前述の通り、本稿で観察したノサ文はノダ文とは用法において異なるものであった。ノサの《披歴用法》は、黄（2017）が「返事をするとき、反論をするとき、過去の経験や知識を示すとき、物事や人物に対する話し手の思い付き（認識）や感情を話すとき」にサが用いられたという説明に当てはまる。このことから、鶴橋（2018）も述べているように、終助詞サが体言類に接続して名詞述語文を作る役割を担っていたとしても、ダとは異なる機能を持っていたのであって、その違いが用言接続のノサ文においても引き継がれていたと考えるのが妥当であろう。

幸松（2020）では、ノサが〈準体助詞ノ＋断定辞相当のサ〉ではなくノサとして一つの終助詞的な形式になっていたと考える文法的根拠として、名詞述語文にも承接すること、疑問詞疑問文の例が１例もないこと、「―ますのさ」のように丁寧体にも承接することの３点を挙げていた。今回用例数を増やして調査した結果、これに加えてノダ文にも承接するノサの例（28）、断定の助動詞ダの終止形に接続するノサの例（29）が見られることもわかった。これらはノサが一つの終助詞的なものであるということを補強する例と考えられる。

(28) そで「夫は左様でもお慈母さまが。自己はマア知らぬ振もして居やうが。何分店の者の前が済ないと被仰て。夫で久さんをお頼みなすつたのでございますのさ。（閑情末摘花）

(29) 女「私に先へ買しておくんなはいヨ　こツちの　はじから三ツ目がもう　／＼可愛くツて／＼命でも遣たい」
清「べらぼうに長文句だノサア　小万さん」（春色恋廼染分解）

3.2　近代における終助詞サ

ここからは、近代に入ってから終助詞サがどのように変化したのかを確認する。『日本語歴史コーパス』明治･大正編の「教科書」以外を対象に、終助詞サがつく文1590例を抽出した。このうち準体助詞ノにサが接続するノサ文278例を除いた1312例を対象にして、間投助詞か終助詞かの判定を行なった。その結果、間投助詞として用いられていると認められるものが234例、終助詞と認められたものは1078例であった[16]。

表５　明治・大正期の終助詞サ

形式	前接品詞	用例数	%
終助詞サ	体言類	754	**69.9**
	用言類	324	**30.1**
	計	1078	100.0

表６　表５のうち、用言接続する終助詞サの内訳

用言接続324例中	用例数	割合
「の」に接続可能なもの	289	**89.2**
「の」に接続できないもの	35	**10.8**
計	324	100.0

終助詞サの文1078例を調べると、754例が体言類に接続するサであった。これは全体の7割であり、相変わらず体言接続の例が多い。しかし用言接続の例も324例見られ、さらにこの324例のうち準体助詞ノを介することができるにもかかわらず直接サが接続している例を調べると289例が見られた。

(30) 織田は思ひ飽んで面を上げ、
「君は不斷に煙草を吸つてる、毒だよ」
「毒だつていいさ」
と、健次は吸殻を吐き出し、(「何処」正宗白鳥 1909)

(31)「多々良さんの頭はどうしたの」と眞面目に聞いて見る。
「虫が食ひました。中々癒りません。奥さんも有んなさるか」
「やだわ、虫が食ふなんて、そりや鬚で釣る所は女だから少しは禿げますさ」(「吾輩は猫である」夏目漱石 1905)

(32)『ああそれが好いわ。はねつこなら私が勝つことよ。何故つてばからだが輕いから。』
『生意氣云つてらあ、女のくせに。僕が勝つに極つてるさ。いいかい。初めるよ。…』(「月の世界」徳永寿美子 1917)

前述のように、近世後期、終助詞サが用言に接続する際には準体助詞ノを介さなければならなかった。つまり上例は近世であれば「毒だっていいのさ」「女だから少しは禿げますのさ」「僕が勝つに極つてるのさ」といったノサ文で表現されていたはずある。その一方で、近世の用法をそのまま引き継いだノサ文も相変わらず見られる。

(33) 今では私まで引取られて、不自由も爲ないで、斯うして生活して居るんだから、これも全くお前のお蔭だしね、お前が何様事をお爲だつて、それを私が兎や角云ふ事は無いのさ。(「櫨紅葉」広津柳浪 1901)

(34) モデル。それでは髪に插す花ですね。
畫家。(じれつた氣に。)髪に插されれば、插させても好いのさ。(「戯曲 家常茶飯」ライネル・マリア・リ

[16] 近世語と同様、ワサ文とトサ文、さらに「ってさ」の文は除外した。

ルケ（作）/ 森鷗外（訳）1909）

(35) はな子。どうなすつたの。雨がふるのに――まあお上りなさいな。

茂男。有難う。今日はね、これから船にのつて烏帽子岩まで、イソギンチヤクを採集に行く**のさ**。（「戯曲生きんとすれば」長田秀雄 1917）

同資料から（30）～（32）のような〈用言＋サ〉が 289 例見られるのに対し、(33）～（35）のような〈用言＋ノサ〉が 278 例見られるので、数の上ではほぼ拮抗しており〈用言＋サ〉と〈用言＋ノサ〉の両立時代と言える。ただしそこには見逃せない質的変化も見られる。近代ノサには、近世ノサに 1 例も見られなかった疑問詞疑問文（36）の例もあり、それと軌を一にするように事情文らしい文（37）の例も見られる。

(36)『おいでつたら！』 慶一は笑ひながら言つた。『なにをそんなに氣まりわるがつてる**のさ**。』（「蛇人」三上於菟吉 1925）

(37) 加藤が 自分の思ふやうにならん と愚痴を言ふなんて、何たる意氣地なしだ。身を捨ててこそ浮む瀬はあれだ。加藤が捨身に出れば横田は助け舟を出すにきまつて居るよ。加藤が『イヤになつた』と言ふのは、實はイヤになつて居らぬから苦しむ**のさ**。（政界煙話・前田蓮山 1925）

ノサ文は元々、披歴性をもって提示する働きを持つ終助詞サを用言述語文に用いるためにノを介したものであり、準体助詞文ではなかったのだろうと考えることはすでに述べた。ところが近代に入り、終助詞サが用言に直接承接するようになった。それにもかかわらず、あえてノサを用いている例の中には、近世の《披歴用法》を引き継いだものもあるが、あたかもノダの代わりに用いられているかのような例も見られるようになった。この現象が何を示しているのかと言えば、おそらくこの時期、ノサに対して、「ノサはノダと同類のもの」という解釈が起こったことを示唆しているのではないだろうか[17]。

先に疑問詞疑問文にノサを用いた例（36）を取り上げた三上於菟吉の小説に、サとノサを、披歴の文か事情文かで使い分けているのではないかと思われる場面が見られる。

(38) 彼は意地悪いほどそつけなく祖父の手を振りはらつた。『祖父さんは、僕がみんなに、蛇のように嫌がられるようになるのを見て死にたいのだね。さうだとも、僕はよく知つてる**さ**。今迄は研究の結果を見るために可愛がつたふりをした**のさ**。それで育ててくれた**のさ**。どうせ僕のお母さんは、祖父さんの本當の娘ぢやないものね。…』（「蛇人」三上於菟吉 1925）

「僕は知ってる**さ**」と披歴するサ文とは異なり、「今迄は研究の結果を見るために可愛がつたふ

[17] 筆者も登壇者の一人として参加した日本語文法学会第 24 回大会の大会企画パネルセッション「ノダ文研究の現在地―ノダの時空間変異から見た研究の展開―」（2023 年 12 月 3 日実施）において、準体助詞ノに終助詞がついた形式がノダ文と同種であると解釈されたことによってこれまでノダが担っていた用法を表すようになった現象について議論があった。ノサ以外の例としては、疑問文を作るノカが挙げられた。同じく登壇者の林淳子氏によれば、近世から現代にかけて、疑問文を作る中心的形式がノカからノデスカに移っていった過程には、ノカがノダ文の疑問文版であると解釈され、潜在するダが丁寧体デスになった可能性が考えられるという。

りをした**のさ**」「それで育ててくれた**のさ**」というノサ文の方は、「祖父はなぜ自分にこうした行動を取ったのか」という〈事情〉を述べる文のようにも読める。しかしまだこの用法には揺れがあり、サとノサが同一文脈で並立していて、両者の間に意味上の差異を求めるのが難しい場合も見られる。

ノサ文がこのような揺れを経験していた近代は、終助詞サの持つ位相的な特徴に大きな変化が起こった時期でもあった。江戸語から東京語への流れの中で、終助詞サは丁寧な会話に使われるという特徴が失われていったという変化が長崎（1998:23）によって報告されている。そして最終的に終助詞サは、「当然と思える内容を聞き手に説明」する、「主に男性が用いる終助詞」（日本語記述文法研究会 2003:249）になっていく。

筆者の調べでもノサの使用頻度は近世から近代にかけて激減している。近世後期において広い位相において便利に用いられていた《披歴用法》のノサは近代以降、別形式によって表されるようになっていくのであるが、次節ではその経緯を述べる。

4. ノサによる《披歴用法》（非事情文）のその後

4.1　雑誌『太陽』による調査

以下に、雑誌『太陽』を用いてノダ系表現全般を調査した表を掲載する。近世後期資料と比較するために会話で用いられた文のみを対象として抽出している。表８のノは、近世に多く見られた終助詞ノ（ウ）とは別で、準体助詞ノであり、断定の助動詞や終助詞などが接続していない（いわゆる）ノ止め文である。近代以降多く用いられるようになったノについて、日本語記述文法研究会（2003:272）では丁寧体接続ノを終助詞、普通体接続ノはノダのダが落ちたものとして分けているが、ここでは両者を区別していない。

表７　雑誌『太陽』における〈ノ＋終助詞〉

形式	動詞	形容詞	名詞	その他	計
ノサ	133	23	16	1	173
ノヨ	127	15	24	2	168
ノス	0	0	0	0	0
計	260	38	40	3	341
%	**76.2**	**11.1**	**11.7**	**0.9**	100.0

表８　雑誌『太陽』における〈ノ〉

形式	動詞	形容詞	名詞	その他	計
ノ	350	42	104	7	503
%	**69.6**	**8.3**	**20.7**	**1.4**	100.0

表９　雑誌『太陽』ノダ（普通体）

形式	動詞	形容詞	名詞	その他	計
ノダ	547	87	52	1	687
ノダナ	65	3	4	0	72
ノダヨ	42	7	5	1	55
ノダネ	33	6	6	0	45
ノダイ	18	1	1	0	20
ノダモノ	13	1	0	0	14
ノダエ	6	0	0	0	6
ノダワ	4	2	0	0	6
ノダゼ	4	1	0	0	5
ノダッケ	4	0	0	0	4
ノダゾ	1	1	0	0	2
ノダニ	1	0	0	0	1
計	738	109	68	2	917
%	**80.5**	**11.9**	**7.4**	**0.2**	100.0

表 10　雑誌『太陽』ノダ（丁寧体）

形式	動詞	形容詞	名詞	その他	計
ノ/ンデス	404	81	64	8	557
ノ/ンデスヨ	83	21	22	4	130
ノ/ンデスネ	42	13	5	0	60
ノ/ンデスモノ	40	5	15	0	60
ノ/ンデスワ	9	2	1	0	12
ノ/ンデスナ	5	0	2	0	7
ンデスゼ	2	0	0	0	2
ンデスエ	1	0	0	0	1
ンデスニ	0	0	1	0	1
ンデスノ	1	0	0	0	1
計	587	122	110	12	831
%	**70.6**	**14.7**	**13.2**	**1.4**	100.0

この表から、近世から近代にかけてのノダ系表現の変化を読み解いていく。まず、前出の表1、表2にまとめた近世後期におけるノダ系表現の使用状況と比較すると、近世後期には丁寧体も含めたノダが355例であり、ノサが337例という結果であった。用いた資料の範囲では、両者の使用頻度がほぼ拮抗していたと言える。それが明治・大正期のテキストである雑誌『太陽』での会話文における使用を見ると、普通体と丁寧体を合わせたノダは1244例（表9の687例と表10の557例を合算）であるのに対して、ノサは173例しか見られない。1：1程度だったものが9：1ほどの差になっている。相対的にノサ文の使用が相当に減少したと言ってよいだろう。

ノサ文が減少したのとは逆に増加したのがノヨ文である。前出の表1に示した通り、近世後期にはノサが337例見られたのに対してノヨは21例であり、ノサに比べてごく少数例であった。それが表7を見ると、ノサが173例、ノヨが168例であり、使用頻度としてはほぼ同じである。

さらに、ノヨ以上に急激に台頭してきたのがノである。近世期に見られる終助詞ノ（ノウ）とは異なる、終助詞や断定の助動詞がつかない準体助詞ノ止めの文であるノ文は近代に入り普及した形式であり、雑誌『太陽』ではこれが503例見られた。このノヨ文、ノ文に近世後期ノサ文と同様の《披歴用法》が見られる。

(39)『…私ね、躰が悪いものですから、それでお暇を戴いて來た**の**。兄様の傍で、當分養生をさして戴きたい**のよ**、可けませんか。』

『可けない事は無いが……困つたな。俺の所には夜具は無し、米は無し、何うも困るぢやないか。』

『可い**のよ**』（「一腹一生」小栗風葉 1901）

(40)『今日は何所へ行くの。』

『ええ。ちよいと會があつて。』

『今日は？』

『今日は寫生に行く**のよ**』（「第一印象」田村俊子 1917）

(39) では「聞いてください」というニュアンスで「体が悪くお暇を戴いて来た」「ここで当分養生をさして戴きたい」と話し手の実情を訴える文や「夜具や米がない」と言われて「（それでも）いい」と答える文にノヨやノが用いられている。(40) では、今日の予定を聞かれ「写生に行く」と答える際にノヨを用いて答えている。これらは近世後期のノサ文に見られた、話し手の知識や評価を聞き手に伝達する《披歴用法》であろう。サが丁寧な会話文に用いられなくなり、主として男性が用いる終助詞に変わっていったため女性が使用できる形式としてノヨやノに変わっていった様子が見られる。

さらに、ノダ文にも大きな変化が見られる。表1にまとめた近世後期における使用状況では、「のだ」「のだよ」「のだね」「のだな」など、終助詞がついた例も全て合わせて、ノダ文が568例見られたと表していたが、ここには丁寧体の文も含まれていた。内訳を述べると、このうち普通体のノダが485例であり、「のでございますよ」「のでございますね」なども合わせたノデゴザイマスが62例、「のですよ」「のですね」「のですは」なども合わせたノデスはたったの10例であった[18]。そのほか、ノデアリマス、ノデゴザンス、ノデゴザルなどが少数ずつ見られるのが近世後期

[18] デスについては湯澤（1954:445）に「今日こんなに普通に用いられる「です」も、江戸のものにはその用例が至って少なく、ふしぎに思われるくらいである。たまたまそれが現れても、花柳界のような特殊社会の人々の口から発せられることが最も多く、その他医者・職人などである」とある。

のノダ丁寧体の全てであった。近代に入り、雑誌『太陽』に見られるノダ系表現の使用状況をまとめた表9と表10からは、普通体が合計917例、丁寧体が合計831例であり、ほとんど同頻度で使用されていることがわかる。長崎（1998:23-24）では、江戸語から東京語へ移行し、近代における共通語的性格を有していく段階で、より合理的な表現形式が求められ、情緒的な面を持つ「さ」「よ」「ね」のような終助詞は断定辞という文法的機能を担う語から外されていったと述べられている。さらに、「幕末に一般的に普及した助動詞「です」の発生も、丁寧な会話で用いられていた「さ」の消滅を促した」という。こうして近代にかけて断定の働きがダ、デスに集約されることによって、ノサやノヨによって表されていた《披歴用法》が、ノダやノデスに吸収されていったことは想像に難くない。

4.2　近代のノダ文に見られる《披歴用法》

以下、かつてノサ文が担っていた《披歴用法》を表すと思われるノダ文を見ていく。

(41)『おウ、民さんだネ、僕の許へ？』と廉藏は例の間の抜けた顔に到つて甘味の無い微笑を泛べつ、『丁度好い處で會つた。一緒に行かう――併し君は腕車だナ？』
『なアに、腕車は還しても宜い**のだ**』と云ひつゝ…（「投機」内田魯庵 1901）

(42) 水野　『如何も困るですなア。然う手をつけては……』
香久　『好い**のですよ**』
水野　『好かア無いです』（「喜劇　無能病」江見水蔭 1909）

(43)『母さん今日は氣分はどうです』と寛三は優しく訊ねた。
『あゝ。氣分は少しは好いやうだけれど、どうも斯う長曳いちやのオ。汝も久し振で歸つても誰も構つてくれる者がなくて』
『そんな事はどうでも好いですよ。母さんさへ氣を丈夫に持つてくだされば、それで僕は好い**んです**』（「漂泊」相馬御風 1909）

（41）～（43）は、話し手の評価判断を伝える《披歴用法》のノダであり、近世後期にはノサで表されていたものである。近代以降のノダに見られる大きな変化として、このような形容詞文の割合が相対的に増えただけではなく、近世後期には見られなかった、名詞や形容動詞語幹にナノダが後接する文が見られるようになったことも挙げられる。

(44) いつとも無しに手を引き合ひ、いつとも無しに寄り添つてゐた。軈て湖水の入江へ出た。
『あら、舟がありますのね。』
『私の所の舟な**んですよ**。』
『ね、乗りませうよ。妾漕げてよ。』（「鼬つかひ」国枝史郎 1925）

(45)『ちつとも知らなかつた、いつ來たの？』
『今來た許りな**んですよ**。あなたは？』
『僕もほんの十五分許り前に來たの。』（「淋しけれども」谷崎精二 1917）

（44）（45）は名詞接続のノダであるが、これらは必ずしもノダ文である必要性はない。舟を指

して「（これは）私の所の舟です」と教えたり、いつ来たのか問われて「今来たばかりです」と答えても文法的な適格性に何ら問題はない。どちらもノダを伴うことで「実は」というニュアンスを添えて聞き手に伝達している《披歴用法》になっていると言える。下の（46）（47）のような名詞の否定文についても近世期にはノサ文にしか見られなかったものがノダで表されるようになっている。

（46）『まあ此方なの？』洋装婦人は急に身を起して、自分の傍へ引き寄せるやうに少年の手をとつた。
『先刻ちよいとお見かけして、どなたのお連れかと思つてましたのよ。山野さん、あなたの……』
『いや、僕もお連れではない**のです**。――君どなたの御紹介？』（「蛇人」三上於菟吉 1925）

（47）お艶　心付きて掻寄せんとするはづみに中より守一の手紙こぼれる。
伍六　何だ、何だ。
つや　なんでもない**んです**よ。（「銅山王」佐野天声 1909）

最後に、動詞文による《披歴用法》の例を挙げる。どれも、与えられた事態の原因・理由や背景事情を述べる事情文としてのノダ文ではなく、「実は」というニュアンスを込めて述べる非事情文のノダ文であると考えられる。

（48）B。「いや、もう來ないよ。それに僕は君にすまないことがある**のだ**。」
A。「なんだ。」（「A と B」武者小路実篤 1917）

（49）鑑三。　ふむ。（間を置く）今日はお醫者は來ましたか。（中略）やつぱりよくないつて云ひましたか。
まさ子。　えゝ。とても舊のやうにはなるまいつておつしやる**んです**よ。
鑑三。どうも困つたものですね。（「生きんとすれば―二幕―」長田秀雄 1917）

（50）第一の客　『どうもあなたのは先月この料理屋でお眼にかゝつたやうな氣がします。あなたの外套をよく覺えてますよ。』
第二の客　『でも、先月、僕はこの外套をもつてなかつた**んです**。』
第一の客　『いや、でも、僕はもつてた**んです**。』（小話 1925）

5. 結論と今後の課題

5.1　事情を表さない《披歴用法》の変化

本稿は、幸松（2020）を受けて、ノサによる「事情を表さない用法」がどのようにしてノダの用法にとりこまれていったのか、その変遷を追うことを目的としていた。

近世江戸期の言語資料から終助詞サについて調査を行なったところ、サは体言類に接続するものが殆どで、用言類に接続するためには準体助詞ノを介する必要があった。こうして作られたノサという形式は終助詞サの発話伝達的な機能を引き継いだものであるため、準体助詞文としてもっぱら〈事情〉を表していたノダ文とは異なる用法を持っていたと考えられる。準体助詞文ではないからこそ、「女であるのさ」のような名詞述語への接続、「女でありますのさ」のような丁寧体への接続、「行くのでありますのさ」のようなノダへの接続などの現象が見られたのだろう。さらに、「どこへ行くのさ」のような疑問詞疑問文のノサ文が見られないのは、述語以外に疑問のスコープを広げることができる準体助詞文ではなかったためと考えられる。

近代に入り、終助詞サはノを介さなくても直接用言に接続できるようになり、《披歴用法》はサ文、ノサ文どちらでも表せるようになっていった。その一方で、おそらくノダ文と同類であると解釈された結果、近世には見られなかった疑問詞疑問文としての使用や、事情文としての使用が見られるように変わっていった。しかしこの時期、広い位相で用いられた終助詞サが機能変化を起こし、丁寧な会話や女性の会話では使われにくくなっていったため、使用数自体は激減、その位相的な穴を埋めるように、ノヨやノの使用が増えていったのだと考えられる。さらに同時期、〈ノ＋終助詞〉によって担われていた《披歴用法》を、ノダ・ノデスの文が担うようになっている様子が見られる。近世期のノダ文のほとんどが動詞文であったのに対して、近代には形容詞文や名詞述語文の例が増えているのは、《披歴用法》を取り込んだ結果であると見られる。こうした過程を経て、現代語ノダの用法として、事情文と非事情文の共存状態が見られるようになったと考えられる。

5.2　今後の課題

本稿では、幸松（2020）で提示した仮説を検証するため、主にノサに対象を絞って研究を行なった。その結果、ノサというのは、近世江戸語の終助詞サが担う発話伝達的な意味合いが強く出た文であったことがわかった。それが近代の言語変化を経て現代語のノダに取り込まれた結果、本来のノダが持ち得ていなかった《披歴用法》が事情文の中に混在するようになったという結論に至った。

もともと終助詞の持つ機能が強く反映されていたノダ系の表現のうち、その意味合いがノダ自体に焼き付けられ、「のだ」の形でその意味を表すようになったというケースは他にも見られる。例えば（いわゆる）発見用法については、(51)（52）に示すように、近世後期は主にノダネ、ノダナが担っていた。（いわゆる）命令用法は、(53)（54）に示すように、近世後期は主にノダヨが担っていた。

(51) 丹「まあ何にしても　火を拵へやう」
　長「をやほんに寒くつて淋しいと思つたら　火がない**のだ**ねへ」（春色梅児与美）

(52) 幸「そうか　酢い酒の壱升も遣つてくれよ　はははははは　それはそうとこまつた奴等だ　客をば其処除にして。あれ見や　不残一所へこぞり寄て　順廻りになつた**のだ**な」（春色辰巳園）

(53) おちせ「…ををそれ／＼ふくい町の豊国が所から人がきたら。わすれずに此ぢうのやしきのを二分やる**のだ**よ」（総籬）

(54) これ金ぼうや。おまへは利口ものだから。おばさんのいふことをよくお聞。あのおまへのおつかさんはの。それは／＼遠うい処へお出だから。もう内には誰ゑもお出だはないよ。それだから内へ行ふ／＼といはずに。おばさんの処にいつまでも居る**のだ**よ（仮名文章娘節用）

近世期において終助詞が担っていた用法がノダに合流したり（ノサ→ノダ）、ノダに焼き付けられたり（ノダネ・ノダナ・ノダヨ→ノダ）といった変化の結果、現在のノダの多様な用法の共存状態を生み出したと言えるのではないかと考えているが、他の終助詞がついたノダ系表現が辿った過程については、次の課題としたい。

［参考文献］
庵ほか（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
庵功雄（2001）『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
奥田靖雄（1990）「説明（その1）―のだ、のである、のです―」『ことばの科学』4　むぎ書房
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』（復刊　和泉書院 2002 年）
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　Ⅱ』くろしお出版
土屋信一（1969：再録 2009）「江戸語の「だ」の一用法」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』再録『江戸・東京語研究―共通語への道』pp.117-134, 勉誠出版
土屋信一（1987：再録 2009）「浮世風呂・浮世床の「のだ」文」『近代語研究』7　武蔵野書院　再録『江戸・東京語研究―共通語への道』pp.225-238, 勉誠出版
鶴橋俊宏（2018）「滑稽本におけるノダとその周辺」『國學院雑誌』119（11），pp.69, 國學院大学
長崎靖子（1998）「江戸語の終助詞「さ」の機能に関する一考察」『国語学』192, pp.13-26, 日本語学会
長崎靖子（2008）「現代語の終助詞「さ」の機能に関する考察」『川村学園女子大学研究紀要』19 巻 2 号 , pp.173-186
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 - 第 8 部 モダリティ -』くろしお出版
野田春美（1997）『の（だ）の機能』くろしお出版
野村剛史（2019）「ノダ文の通時態と共時態」『認知言語学を拓く』pp.285-304, くろしお出版
黄孝善（2017）「近世後期江戸語終助詞「サ」の意味」『文化』80（3・4），pp. 229-212, 東北大学文学会
益岡隆志（2001）「説明・判断のモダリティ」『神戸外大論叢』52 巻 4 号 , pp.1-25
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店
幸松英恵（2016）「「発見のノダ」について」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』2, pp.89-111
幸松英恵（2020）「事情を表わさないノダはどこから来たのか―近世後期資料に見るノダ系表現の様相―」『東京外国語大学国際日本学研究』プレ創刊号，　pp.162-178
幸松英恵（2022）「「命令のノダ」とは何か」『東京外国語大学国際日本学研究』2, pp.164-182
湯澤幸吉郎（1954）『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

［使用コーパス］
国立国語研究所（2005）『太陽コーパス―雑誌『太陽』日本語データベース―』（2021 年 11 月 24 日確認）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅰ洒落本』（2019 年 11 月 25 日確認）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅱ人情本』（2019 年 11 月 25 日確認）
国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ雑誌／Ⅲ明治初期口語資料／Ⅳ近代小説／Ⅴ新聞／Ⅵ落語 SP 盤』（2022 年 8 月 7 日確認）
国文学研究資料館（2012）「日本古典文学大系本文データベース」（2020 年 6 月 20 日確認）

［コーパスの中に含まれている作品一覧］
花廼志満台、春色梅兒譽美、春色江戸紫、春色辰巳園、仮名文章娘節用、恋の花染、春色連理の梅、明烏後の正夢、閑情末摘花、今様操文庫、風俗吾妻男、清談峯初花、春色恋廼染分解／郭中奇譚、侠者方言、南閨雑話、甲駅新話、当世左様候、深川新話、総籬、仕懸文庫、花街鑑、花街寿々女、卯地臭意、辰巳之園、青楼昼之世界錦之裏、軽井茶話道中粹語録、傾城買四十八手、傾城買二筋道／江戸生艶気樺焼、手前勝手御存商売物、大極上請合売心学早染艸、文武二道万石通、榮花程五十年蕎麦価五十銭見徳一炊夢、東海道中膝栗毛、浮世風呂／傾城壬生大念仏、幼稚子敵討、お染久松色読販、小袖曽我薊色縫、名歌徳三舛玉垣、神霊矢口渡、景清、助六、鳴神、毛抜、韓人漢文手管始、夏祭浪花鑑、鎌倉三代記、新版歌祭文、假名手本忠臣蔵
※ 江戸語で用いられる形式に限定しているため、一例も収集していない作品も含んでいる

［付記］本論文の内容は科研費 19K13199「ノダ系推論表現の日本語推論体系における位置付けと通時的変遷について」の成果の一部を含む。

（ゆきまつ　はなえ　東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授）

Tracing the origins of NODA that does not Connote “Reason” part 2

YUKIMATSU Hanae

KEYWORDS: NODA, NOSA, sentence-ending particle SA, diachronic research on NODA

The usage of “ノダ” in Modern Japanese, which does not express “事情” (explanation for the reason of a certain condition”, was observed in the late modern period, particularly in the form of ＜ノ (particle) + sentence-ending particle＞. During this time, the usage of “ノサ” was especially prevalent.

In late Edo-period, the sentence-ending particle “サ” was predominantly used in sentences connected to nouns, and when connecting it to verb and adjective the quasi-nominative particle “ノ” was necessary.

“ノサ,” inherited the communicative function of the sentence-ending particle “サ.” Therefore, it is considered to have a usage distinct from that of “ノダ,” which, exclusively in quasi-nominative particle constructions, primarily conveyed circumstances related to “事情” .

Subsequently, the sentence-ending particle “サ” underwent a functional shift, becoming less common in polite and feminine conversations. As a result, it is thought that the usage of “ノヨ” and “ノ” increased. Furthermore, in the modern era, the role of definitive assertion previously held by “サ” and “ヨ” became consolidated into “ダ” and “デス.” Consequently, the usage attributed to “ノサ” and “ノヨ” gradually became established in contemporary Japanese as “ノダ” and “ノデス.”

Through such a process, it is believed that in the usage of contemporary Japanese “ノダ,” a coexistence of expressions related to circumstances and those unrelated to circumstances has become evident.